

沼城小学校旧中央校舎 調査報告書(要約版)

新南陽支部

1. 調査概要

- 所在地 : 山口県周南市須々万本郷 711
- 調査対象 : 沼城小学校旧中央校舎
- 調査日 : 令和 7 年 6 月 21 日
- 調査者 : 徳田淳(支部青年部)、倉増一成(支部青年部)、玉木賀子(支部青年部)、原田正彦(山口県建築士会HM協議会副会長)、戸倉幸夫(HM)、小野稔(HM)、山崎一夫(HM) 以上 7 名
- 立会者 : 河村雅典(管理者)、国重義久(郷土史家)

2. 調査目的

本調査は、歴史的建造物の価値を再認識し、地域資源としての保存および活用に向けた基礎資料を作成することを目的とする。

また、所有者や管理者及び地域との連携による持続的な維持管理の方向性を検討する。

さらに青年部を主とした支部会員の活動により、支部活動の活性化を促す。



正面外観
(樹木により全景の見通しが困難)



西面見上
(外壁や庇の一部に経年劣化が見られる)

3. 建物の沿革(要約)

本建物は明治19年(1886年)建設であり、全国的にも稀有な存在を示す校舎である。建物詳細は後述するが、本校舎の存在は人々の記憶や学校年史等により確認されていたものの、昭和27年に校地から民地へ移築された後、本校舎の前側に私邸が建設されたため、人々の目に触れることがなくなり近隣住民からも忘れ去られていた。

令和 4 年(2022年)春、本校舎の前側に建てられていた私邸の解体に併せ樹木も一部伐採されたため、本校舎が人々の目に触れることになった。近隣住民の中には、「昔通った校舎がこんなところにあった。」と驚きを隠せない高齢者も少なくない。

所有者家族も当地に不在のため、屋根等に一部損傷が見られるが、移築までして保存しようとした意識ある先人の思いと今まで何とか生き延びてきた数奇な運命を辿るこの歴史的建造物の将来を考えるため今回の調査を実施した。

4. 建物の特徴

- 構造 : 木造二階建て
- 面積 : 延べ面積 264㎡、建築面積 142㎡
(玄関車寄せ含む)
- 屋根 : 寄棟(江津瓦葺き、勾配6寸)、玄関屋根切妻、1階建物周囲出幅90cmの庇付玄関屋根瓦に菊水紋様や鳩の棟飾り
- 軒裏 : 杉板張り
- 外壁 : 土塗り壁(竹小舞)の上漆喰塗り仕上げ
木部(柱、梁)現し、差し鴨居付
- 内部床 : 1、2階とも木板張り仕上げ、2階の一部畳敷き
- 内壁 : 外壁土塗り壁の内面も漆喰塗り仕上げ
- 天井 : 1階は踏み板天井(2階床板張り裏面現し)、2階は杉板竿縁天井(天井が針金で吊っており、野縁受けは確認できず。また天井仕上材の仕舞いとして階段横に点検口あり)
- 建具 : 木製建具(窓、出入口共)透明ガラス入り、鉄レール、戸車付き(雨戸、錠戸等無し)

□小屋組：和小屋組（材料は丸太材、京呂組）、軒桁に梁丸太が「かぶとあり掛け」で取り付き、他は中央部の「梁受け丸太」に「台持ち継ぎ」で反対方向の梁丸太と接続。小屋束の振れ止め貫材が二段（縦、横方向）取付

寄棟隅部分の屋根垂木は「平行垂木」の納まりで、軒先に方杖付きの受け材あり、補強材を利用して軒天井が取り付く、面戸板は確認できず

□その他：柱は、角柱（通し柱）7寸角、管柱は6寸角、柱間6尺3寸

建物周囲に濡れ縁の痕跡あり

建物中央に一間幅の木製階段あり

壁、床に目立った狂いは生じてない

西側壁面に柱を含め延焼跡あり（明治40年西校舎焼失時の貰い火と思われる）

小屋裏内に棟札、図板、尺杖等は確認出来ず

車寄せには舟肘木を使い、屋根の破風板両端には透かし彫りの細工あり

また調査者の意見として、以下の点が疑義として挙げられている。

- 屋根垂木と野地板の施工時期が違うのではないか（野地板が新しく感じる）
- 野地板は、建設当時は木材でなく、竹材だったのではないか（移転時に葺き瓦を降し、木の野地板に取り替えたのではないか）
- 1階底部分は建設当時のものか
- 階段を登り切った正面は奉安庫又は泰安所だったのではないか（部材らしきものが放置されている）

また予備調査時には、移転の方法として解体移転か曳家移転なのかが不明だったが、柱や梁の部材接合部に組み合わせ記号と思われる墨書が散見されたり、種々の資料から鑑みれば、解体により現在地へ移築したものと推察される。



北面外観



東面外観



玄関（奥に階段）



西面外観



1階内部（東側）



階段見降ろし



2階内部（東側）



2階内部（北側）

5. 今後の展開

明治19年（1886年）に建設され、昭和28年（1953年）に河村家へ移築された旧中央校舎は、暫くこの町の公民館的な利用がされていた。その後、昭和43年（1968年）に河村家に無償譲渡という形で所有権移転がなされたのではないかとされていたが、最近新たに見つかった文書により、旧徳山市より払い下げとされた事が判明した。

公民館的な利用として使われなくなった後は、河村家の離れや倉庫、アトリエなどとして使われてきた。そして昭和54年以降、数百万円の私費を投じて屋根瓦の葺替え工事も行われたようだ。

昭和54年沼城小学校が現在の校地に新築移転の頃、歴史的建造物として旧徳山市に保存管理を請願する動きもあったが、周辺の学校での同要望の調整もあり、本校舎のみ特別扱いは困難となったようだ。その後、令和2年河村家家屋解体が始まった頃も市へ保存の相談を持ちかけたが、財政的な問題もあり、保存への機運は頓挫している。

現在の所有者は東京在住のため、代わりに須々万在住の親族が管理をしているが、経年劣化による屋根瓦の一部落下や外壁の剥離等の対応は経済的にも困難を極めると考えられる。

令和6年12月に現地を確認し、令和7年6月に現地調査を行ったが、明治建設の学校として全国的にも稀有な存在であると改めて感じている。

私たちの今後の取り組みとしては、所有者や管理者の意向を確認しながら、今後の展開を考えていく必要があるだろうが、可能であれば登録有形文化財への認定を視野に歴史的建造物として保存活用の取り組みを考えていきたい。



左より(敬称略) 山崎(撮影)
小野、玉木、戸倉、倉増、徳田、河村、国重、原田

□参考文献

- 「沼城小学校百二十年記念誌 120年のあゆみ」
- 「明治の木造建築 沼城小学校旧本校舎」
河村雅典作成
- 「沼城小学校旧中央校舎の保存・活用をめぐる」
(第46号徳山地方郷土史研究会掲載)
- 国重義久著
- 「やまぐち近代建築ノート」原田正彦著

□調査所見

戸倉幸夫(スケッチ作成)、原田正彦

□図面作成

徳田淳

□報告書作成

山崎一夫(文責)

